

〈論文〉

『人間と芸術』

——太宰治のマルキシズムへの母源迷走と

その芸術作品への形象化をとうして——』

原子 修

日常我としての津島修治の、一九二八（昭和三）年五月の個人編集同人誌『細胞文芸』創刊（一九歳）から、一九三二（昭和七）年一二月、青森検事局に出頭して、左翼運動からの離脱を誓約するまでの、五年あまりの、コミニズムとの接触経験は、彼じしん、一九四六（昭和二一）年四月一日発行の『文化展望』創刊号に発表した小説『一五年間』の中で、つぎのように虚構表現しているような、当時の若年知識人層のすくなからざるものがかいくぐった、いわば一種の、通常儀礼のアーチであった。

いったい私たちの年代の者は、過去二十年間、ひでえめにばかり遭つて来た。それこそ怒濤の葉つばだった。めっちゃ苦茶だった。はたちになるやならずの頃に、既に私たちの殆んど全部が、れいの階段闘争に参加し、或る者は投獄され、或る者は學校を追はれ、或る者は自殺した。

それに、さらに、相馬正一の『評伝 太宰治』第一部中の、つぎの一文をかきねあわせれば、すでに、事態は明白であろう。

この昭和五年という時期は、単に左翼文学の全盛期であったばかりでなく、反左翼派ないしは無関心派が一樣にその文壇的存在をおびやかされるような不安定な状況下にあった。昨日までのブルジョア作家やモダニズムの作家たちが、先を争ってプロレタリア文学や同伴者文学に衣更えするという現象が珍しくなかった時代である。

修 その時流におのれを照準しようとした修治は、しかし、はなから、コミニズムの正体をも、同時に見破っていた形跡がつよい。

原 子 その、なによりの証拠のひとつが、相馬正一の前書中の、前掲の文につづく、つぎの指摘であろう。

このような時期に、「私は左傾することなしに作家としての道をつけたいと思ってる」という井伏のような生き方は、当時においてはむしろ偏屈で無思想なアナクロニズムとして経蔑された。赤一色に塗りつぶされようとしていた文壇地図の中で、徒党も組まず自らの信念に従って依怙地に孤塁を守りとおすことが、ほとんど至難の業とさえ思われた時期である。しかし、文壇におけるそのような井伏の困難な立場を充分承知の上で接近を図った太宰が、入門早々「学生群」のような左翼的作品を発表したことは、それなりの理由があった。

相馬正一は、さらにつづけて、その理由として、「一日も早く新進作家として世に認められたいという文学青年に共通

した野心的なあせり」と「このころ太宰はしきりに左翼運動への参加を勧誘されていた」という二点をあげているが、ともあれ、当時の修治が、表層的には、マルキシズム系のプロレタリア文学を志向しつつも、深層的には、マルキシズムに自己限定することを厳しく拒絶する井伏鱒二を選択した、という事実は、みのがしがたい。

たしかに、修治が、弘前高校時代から東大生時代にかけて、二〇世紀人類の壮大な実験のひとつとしてのマルキシズムに、好奇心と知識欲に富んだ青年としての、ただならぬ関心をよせたことは、否めまいし、また、それをもって、修治を、マルキシズムの俘囚とよぶこともできまい。

しかし、二〇世紀前葉を生きた、ひとりの鋭敏な魂にとって、それが、すくなくからざる通過儀礼の傷痕となった、という事実も、また、みとめなければなるまい。

風は夜になつていよいよ強く吹き、九時頃から雨もまじり、本當の嵐になつた。二、三日前に巻き上げた縁先の簾すだれが、ばたんばたと音をたてて、私はお座敷の隣りの間で、ローザ・ルクセンブルグの「經濟學入門」を、奇妙な興奮を覚えながら読んでゐた。これは私が、こなひだお二階の直治の部屋から持つて來たものだが、その時、これと一緒に、レニン選集、それからカウツキイの「社會革命」なども無斷で拜借して來て、隣りの間の私の机の上ののせて置いたら、お母さまが、朝お顔を洗ひにいらした時に、私の机の傍を通り、ふとその三冊の本に目をとどめ、いちいちお手にとつて、眺めて、それから小さい溜息をついて、そつとまた机の上に置き、淋しいお顔で私のはうをちらと見た。けれども、その眼つきは、深い悲しみに満ちてゐながら、決して拒否や嫌惡のそれではなかつた。お母さまのお読みになる本は、ユーゴー、デウマ父子、ミュツセ、ドオデエなどであるが、私はそのやうな甘美な物語の本にだつて、革命のほひがあるのを知つてゐる。お母さんのやうに、天性の教養、といふ言葉もへんだが、そんなものを

お持ちのお方は、案外なんでもなく、當然の事として革命を迎へる事が出来るのかも知れない。私だつて、かうして、ローザ・ルクセンブルグの本など読んで、自分がキザつたらしく思はれる事もないではないが、けれどもまた、やはり私は私なりに深い興味を覚えるのだ。ここに書かれてあるのは、経済學といふ事になつてゐるのだが、経済學として讀むと、まことにつまらない。實に單純でわかり切つた事ばかりだ。いや、或ひは、私には経済學といふものがまったく理解できないのかも知れない。とにかく、私には、すこしも面白くない。人間といふものは、ケチなもので、さうして、永遠にケチなものだといふ前提が無いと全く成り立たない學問で、ケチでない人にとつては、分配の問題でも何でも、まるで興味の無い事だ。それでも私はこの本を讀み、べつなところで、奇妙な興奮を覚えるのだ。それは、この本の著者が、何の躊躇も無く、片端から舊來の思想を破壊して行くがむしやらかな勇氣である。どのやうに道徳に反しても、戀するひとのところへ涼しくさつさと走り寄る人妻の姿さへ思ひ浮ぶ。破壊思想。破壊は、哀れで悲しくて、さうして美しいものだ。破壊して、建て直して、完成しようといふ夢。さうして、いつたん破壊すれば、永遠に完成の日が來ないかも知れぬのに、それでも、したふ戀ゆゑに、破壊しなければならぬのだ。革命を起さなければならぬのだ。ローザはマルキシズムに、悲しくひたむきの戀をしてゐる。

小説『斜陽』中のこの部分は、あきらかに、「非日常我」として仮構された女主人公の和子が、「日常我」としての津島修治の、青年期におけるマルキシズム体験から汲みあげた、革命の論理の、流麗な虚構表現であろう。

「包摂我」としての太宰治が、ポーランド生まれの、ドイツ共産党の前身たるスパルタクス団を組織して第一次大戦後社会主義革命をくわだて虐殺された女性マルキシストのローザ・ルクセンブルグを、「非日常我」としての和子の生き方に擬したのも、けつして偶然ではないし、また、『斜陽』中の、和子の、「人間は戀と革命のために生れて來たのだ。」と

いう述懐も、青年期の津島修治の、マルキシズムとの出会いと、芸者小山初代との邂逅との、ほとんど時間的な一致という原体験との、虚構的なかかわりを感じさせる。

しかし、小説『斜陽』の全篇をつらぬく、『包摂者』たる作者太宰治の、マルキシズムへの主調は、けっして、好意あるものではなく、むしろ、つよい揶揄のトーンにつらぬかれている。

兵隊がえりの不頼な弟直治という「非日常我」をかりて、作者太宰治の「包摂我」は、つぎのように、書きとめさせる。

思想？ ウソだ。主義？ ウソだ。理想？ ウソだ。秩序？ ウソだ。誠意？ 眞理？ 純粹？ みなウソだ。牛

島の藤は、樹齡千年、熊野の藤は、數百年と稱へられ、その花穂の如きも、前者で最長九尺、後者で五尺餘と聞いて、ただその花穂にのみ、心がをどる。

アレモ人ノ子。生キテキル。

論理は、所詮、論理への愛である。生きてゐる人間への愛では無い。

金と女。論理は、はにかみ、そそくさと歩み去る。

歴史、哲學、教育、宗教、法律、政治、經濟、社會、そんな學問なんかより、ひとりの處女の微笑が尊いとふフアウスト博士の勇敢なる實證。

學問とは、虚榮の別名である。人間が人間でなくならうとする努力である。

文中の「思想」にマルキシズムを、「主義」にコミュニズムを、「理想」にプロレタリア独裁を、「秩序」に國際プロレ

タリア革命をおきかえれば、そのまま、それは、井伏鱒二流の反マルキシズムとなろう。

もともと、マルクスとエンゲルスによつて一八四八年二月公刊の『共産党宣言』は、「一切の従来社会の歴史は階級闘争の歴史である」（マルクス・エンゲルス『共産党宣言』リヤザノフ註解・早川二郎譯——東京 ナウカ社刊——）（以下の引用はすべてこれによる）という書き出しではじまるが、文中の「社会の歴史」についてのつぎの註をみのがすわけにはいかない。

修 \* 正確にいへば、文書によつて傳つてゐる歴史のことである。一八四七年には、有史前の社会史、すべての書かれてある歴史より以前にあつた社会組織は、まだ殆んど知られてゐなかつた。その後、ハクストハウゼンはロシアで、土地共有制を發見し、マウレルはそれを、全ドイツ民族が歴史上出發してきた、社会の基礎であるとして指示した。そ

子 して次第に、土地共有制の村落體がインドからアイルランドに至るまで、社会の原始形態であつたといふことが知られてきた。終に、この原始共産社会の内部的組織が、モルガンの氏族の眞の性質とその種族シュテムに於て占める地位とのすぐれた發見によつて、その典型的共産社会の内部的この原始共同體コムミュンの崩壊と共に、社会の、個々の、遂には互ひに對立する諸階級への分裂が始まる。

ここで指摘された「原始共同體」こそは、「原始共産社会」の原型をなすもので、いわば一種の「詩的共同體」的な性格をもつものといえる。

津島修治のうまれ故郷の津輕に残像として陽炎状にゆらめく「縄文人タイプの母源世界」も、また、それであつた。しかし、『共産党宣言』は、「原始共同體の崩壊とともに、「我々の時代、ブルジョアジーの時代は、階級対立を單純化

したといふことを特徴としてゐる。全社会は次第次第に、敵対する二大陣営、直接相互に対立する二大階級に分裂しつつある。既にブルジョアジーとプロレタリアートである。」という二極対立が、ついには、暴力革命にいたる、と宣言する。

我々はいま、プロレタリア発展の・最も一般的な諸段階を叙述して、分明不分明の差こそあれ現存社会の内部にひそんでゐるところの・内亂が、公然の革命となつて爆發し、ブルジョアジーの暴力的打倒によつてプロレタリアートが政權を樹立する點にまで到達した。

そして、ついに、「国家」が、全權をにぎる最終段階が、つぎのように予言される。

プロレタリアはその政治的支配權を利用して逐次にブルジョアから一切の資本をもぎ取るであらう。一切の生産機關を國家の手に、即ち支配階級として結成されたプロレタリアの手に集中するであらう。そして生産力の總量を出來るだけ急速に増大するであらう。

この、きわめて煽動的でドラステイックな宣言は、「彼等の目的は一切の従來の社會組織を強力的に顛覆する事によつてのみ達せられる。支配階級をして共產主義革命の前に戦慄せしめよ。プロレタリアは自分の鎖より外に失ふべき何物ももたない。そして彼等は獲得すべき全世界をもつてゐる。萬國のプロレタリア團結せよ！」でおわっているが、「暴力革命」による「プロレタリア独裁國家」への幻想と、「永続革命」による「國際プロレタリア革命」への夢想が、一九一七年のロシア革命をよびさまし、全世界の知識人層に、マルキシズム偏執シンドロームを蔓延させる。

しかし、若き修治が、本能的にかぎつけたのは、けっして、「暴力革命」の快感でも、「プロレタリア独裁国家」への狂信でも、「国際プロレタリア革命」への野望でもなく、マルキシズムの深層にくらくうずくまっている、「原始共同体」への母源回帰願望だった。

その原体験は、後年、一九四八（昭和二三）年、三九歳の時の小説『人間失格』の中に、「包摂我」たる太宰治の手をかりて、「非日常我」たる登場人物の「自分」（大庭葉蔵）に、つぎのように虚構表現された。

堀木は、また、その見榮坊のモダニテイから、（堀木の場合、それ以外の理由は、自分には今もって考へられませんのですが）或る日、自分を共産主義の讀書會とかいふ（R・Sとかいつてゐたか、記憶がはつきり致しません）そんな、祕密の研究會に連れて行きました。堀木などといふ人物にとつては、共産主義の祕密會合も、れいの「東京案内」

の一つくらゐのものだったのかも知れません。自分は所謂「同志」に紹介せられ、パンフレットを一部買はされ、さうして上座のひどい醜い顔の青年から、マルクス經濟學の講義を受けました。しかし、自分には、それはわかり切つてゐる事のやうに思はれました。それは、さうに違ひないだらうけれども、人間の心には、もつとわけのわからない、

おそろしいものがある。慾、と言つても、言ひたりない、ヴァニテイ、と言つても、言ひたりない、色と慾、とかう二つ並べても、言ひたりない、何だか自分にもわからぬが、人間の世の底に、經濟だけでない、へんに怪談じみたものがあるやうな氣がして、その怪談におびえ切つてゐる自分には、所謂唯物論を、水の低きに流れるやうに自然に肯定しながらも、しかし、それに依つて、人間に對する恐怖から解放せられ、青葉に向つて眼をひらき、希望のよこびを感じるといふ事は出来ないのです。けれども、自分は、いちども缺席せずに、そのR・S（と言つたかと思ひますが、間違つてゐるかも知れませんが）なるものに出席し、「同志」たちが、いやに一大事の如く、こはばつた顔



をして、一プラス一は二、といふやうな、ほとんど初等の算術めいた理論の研究にふけつてゐるのが滑稽に見えてた  
まらず、れいのお自分のお道化で、會合をくつろがせる事に努め、そのためか、次第に研究會の窮屈な氣配もほぐれ、  
自分はその會合に無くてはかなはぬ人氣者といふ形にさへなつて來たやうでした。この、單純さうな人たちは、自分  
の事を、やはりこの人たちと同じ様に單純で、さうして、樂天的なおどけ者の「同志」くらゐに考へてゐたかも知れ  
ませんが、もし、さうだつたら、自分は、この人たちを一から十まで、あざむいてゐたわけです。自分は、同志では  
無かつたんです。けれども、その會合に、いつも缺かさず出席して、皆にお道化のサーヴィスをして來ました。

好きだつたからなのです。自分には、その人たちが、氣にいつてゐたからなのです。しかし、それは必ずしも、マ  
ルクスに依つて結ばれた親愛感では無かつたのです。

非合法。自分には、それが幽かに樂しかつたのです。むしろ、居心地がよかつたのです。世の中の合法といふもの  
のはうが、かへつておそろしく、（それには、底知れず強いものが豫感せられます）そのかわりが不可解で、とてもそ  
の窓の無い、底冷えのする部屋には坐つてをられず、外は非合法の海であつても、それに飛び込んで泳いで、やがて  
死に到るはうが、自分には、いつそ氣樂のやうでした。

日蔭者、といふ言葉があります。人間の世に於いて、みじめな、敗者、悪徳者を指差していふ言葉のやうですが、  
自分は、自分を生れた時からの日蔭者のやうな氣がしてゐて、世間から、あれは日蔭者だと指差されてゐる程のひと  
と逢ふと、自分は、必ず、優しい心になるのです。さうして、その自分の「優しい心」は、自身でうつとりするくら  
ゐ優しい心でした。

また、犯人意識、といふ言葉もあります。自分は、この人間の世の中に於いて、一生その意識に苦しめられながら  
も、しかし、それは自分の糟糠の妻の如き好伴侶で、そいつと二人きりで侘びしく遊びたはむれてゐるといふのも、

自分の生きてゐる姿勢の一つだつたかも知れないし、また、俗に、脛すねに傷持つ身、といふ言葉もあるやうですが、その傷は、自分の赤ん坊の時から、自然に片方の脛にあらはれて、長ずるに及んで治癒するどころか、いよいよ深くなるばかりで、骨にまで達し、夜々の痛苦は千變萬化の地獄とは言ひながら、しかし、（これは、たいへん奇妙な言ひ方ですけど）その傷は、次第に自分の血肉ちくじくよりも、親しくなり、その傷の痛みは、すなはち傷の生きてゐる感情、または愛情の囁きのやうにさへ思はれる、そんな男にとつて、れいの地下運動のグルウプの雰圍氣が、へんに安心で、居心地がよく、つまり、その運動の本來の目的よりも、その運動の肌が、自分に合つた感じなのでした。堀木の場合は、ただもう阿呆のひやかしで、いちど自分を紹介したその會合へ行つたきりで、マルキシストは、生産面の研究と同時に、消費面の視察も必要だなどと下手な洒落を言つて、その會合には寄りつかず、とかく自分を、その消費面の視察のほうにばかり誘ひたがるのでした。思へば、當時は、さまざまの型のマルキシストがゐるたものです。堀木のやうに、虚榮のモダニテイから、それを自稱する者もあり、また自分のやうに、ただ非合法の匂ひが氣にいつて、そこに坐り込んでゐる者もあり、もしもこれらの實體が、マルキシズムの眞の信奉者に見破られたら、堀木も自分も、烈火の如く怒られ、卑怯なる裏切者として、たちどころに追ひ拂はれた人でせう。しかし、自分も、また、堀木でさへも、なかなか除名の處分に遇はず、殊にも自分は、その非合法の世界に於いては、合法の紳士たちの世界に於けるよりも、かへつてのびのびと、所謂「健康」に振舞ふ事が出来ましたので、見込みのある「同志」として、嘖き出したくなるほど過度に祕密めかした、さまざまの用事をたのまれるほどになつたのです。また、事實、自分は、そんな用をいちども斷つたことは無く、平氣でなんでも引き受け、へんにぎくしやくして、犬（同志は、ポリスをさう呼んでるました）にあやしまれ不審問などを受けてしくじるやうな事も無かつたし、笑ひながら、また、ひとを笑はせながら、そのあぶない（その運動の連中は、一大事の如く緊張し、探偵小説の下手な眞似みたいな事までして、極度の警戒を

用ゐ、さうして自分にたのむ仕事は、まことに、あつけにとられるくらゐ、つまらないものでしたが、それでも、彼等は、その用事を、さかんに、あぶながつて力んでゐるのでした」と、彼等の稱する仕事を、とにかく正確にやつてのけてゐました。自分のその当時の氣持としては、黨員になつて捕へられ、たとひ終身、刑務所で暮すやうになつたとしても、平氣だつたのです。世の中の人間の「實生活」といふものを恐怖しながら、毎夜の不眠の地獄で呻いてゐるよりは、いつそ牢屋のほうが、樂かも知れないとさへ考へてゐました。

なぜ、作中の「自分」は、「同志」たちが、いやに一大事の如く、こはばつた顔をして、一プラス一は二、といふような、ほとんど初等の算術めいた理論の研究にふけてゐるのが滑稽に見えてたまらずだつたのにもかかわらず、「好きだつたからなのです。自分には、その人たちが、氣にいつてゐたからなのです。しかし、それは必ずしも、マルクスに依つて結ばれた親愛感では無かつたのです。」といつて、「その會合に、いつも缺かさず出席して、皆にお道化のサーヴィスをして來」たのか。

「包摂我」たる太宰治は、その理由として、「非合法者」「日蔭者」「犯人意識」の三つを、「非日常我」たる「自分」にあたえているが、それらこそは、「日常我」たる津島修治の、国家の首都たる東京にシンボライズされる「散文的抗争体」系の実世界の渦中にあつて、なおも、辺境津輕に象徴される「詩的共同体」系の母源奪還複合を秘守するという、ひとりぼっちの蜂起のすがたそのものの虚構表現であつた。

であればこそ、「れいの地下運動のグループの雰圍氣が、へんに安心で、居心地がよく、つまり、その運動の本來の目的よりも、その運動の肌が、自分に合つた感じなのでした。」という述懐であり、また、「殊にも自分は、その非合法の世界に於いては、合法の紳士たちの世界に於けるよりも、かへつてのびのびと、所謂「健康」に振舞ふ事が出來まし

たので、」という告白であろう。

しかし、 Kommunismus が、その根源的な発生原点としての、きわめて「詩的共同体」的な「コムミュウム」、もつとありていにいえば「コミュニティ」（生活協同体）への母源回帰願望をうちに深く秘めながらも、「プロレタリア革命」という遠心的な幻想におのれを遠く放擲したすえ、批判対象としたブルジョアジー世界のもついちじるしい「散文的抗争体」的な国家の、暴力・権力・統制・管理・抑圧・粛清・侵略・戦争・文化破壊などのおそろしい特徴をそっくりうけつぎ、さらに独裁王権化へと退行したとき、 Kommunismus は、自壊しはじめた。

たしかに、エンゲルスは、『空想から科学への社会主義の發展』（堺利彦訳・彰考書院）の中でいう。

修 「従來の階級對立によつて運轉した社會は、國家を必要とした。」

子 「しかしながら勞働階級は、それによつてプロレタリアとしての自己を絶滅し、またそれによつて一切の階級差別および階級對立を絶滅し、更に國家としての國家をも絶滅する。」

原 「即ち古代においては奴隸所有者の國家、中世にあつては封建貴族の國家、現代にあつてはブルジョアジーの國家。しかるに、その國家が遂に全社會の本當の代表となる時には、それ自ら無用の長物となる。」

しかし、その後の歴史的事実のすべては、エンゲルスの幻想をうちくだいた。

そして、その幻想性は、「日常我」たる修治の原体験からくみあげられた「非日常我」たる大庭葉蔵の、『人間失格』中の、つぎのような洞察によつても、ものの見事に裁断された、といえる。

それは、さうに違ひないだらうけれども、人間の心には、もつとわけのわからない、おそろしいものがある。慾、と言つても、言ひたりない、ヴァニテイ、と言つても、言ひたりない、色と慾、とかう二つ並べても、言ひたりない、

何だか自分にもわからぬが、人間の世の底に、經濟だけでない、へんに怪談じみたものがあるやうな気がして、その怪談におびえ切つてゐる自分には、所謂唯物論を、水の低きに流れるやうに自然に肯定しながらも、しかし、それに依つて、人間に對する恐怖から解放せられ、青葉に向つて眼をひらき、希望のよろこびを感じるといふ事は出来ないのではした。

この、「包摂我」たる太宰治が直感した「怪談」性こそは、国家の絶滅とは正反対の方向に走つた多くのコミュニストたちの国家の私物化による自滅現象の本性をつくものであり、また、「だから、われわれは、国家と言うかわりに、どこでも『共同体』(Gemeinwesen)ということばをもちいるように提案したい。」という、エンゲルスのベーベルあての手紙中の提言(『国家と革命』レーニン著、堀江邑一訳、国家文庫社刊)のもつ、母源回帰本能の限界を婉曲にいいあてたものといえる。

そうなのだ。

「コミュニオン」は、けつして、国家と両替できない。

しかし、コミュニティ(生活共同体)の、古代ギリシアのポリス(都市国家)型化と、その無限のグローバルな連帯は、「国家は、組織された暴力である。」というレーニンの規定から国家を改心させ、ついには、世界国家へと個別国家の機能を大幅に吸収させうる、ほとんど唯一の戦略といえる。

コミュニティズム。

ほとんど、人口二万人以上にするのをよしとしなかつた古代ギリシア人のポリス観にもとづいての、「詩的共同体」復権の唯一の磁場としての、コミュニティ。

修治が、無意識に奪還しようとしていたのも、それだった。

すでに、あらかた、弥生人・騎馬人複合タイプの「散文的抗争体」によって篡奪されつくした、津軽の、たけを中心とする残像としての「詩的共同体」へと深く潜入し、「個人的無意識」「集合的無意識」複合としての母源にたどりつくこと。

それが、修治の深層心理の一貫した志向であり、たけを円心とするコミュニティズムの円環のほのあたたかい母源空間こそは、彼のホメオ・スタシスのこよなき保全の場であった。

つまり、修治は、コミュニティズム願望を、コミュニティズム状況の中で、医籍し、なだめたのだ。

「プロレタリア独裁国家」による「プロレタリア世界国家」の樹立という、大それた遠心運動よりは、ひととひとがひっそりとして生きて生きる、ちいさな「生活共同体」へと、おのれの内部世界をきびしく求心運動していくために、あえて、存在しないコミュニティズムの代替としてのコミュニティズム環境に、足をふみいれてみたのだ。

小説『人間失格』中の、「れいの地下運動のグルウプの雰圍氣が、へんに安心して、居心地がよく」という、「非日常我」たる「自分」の告白は、まさに、小説『津軽』中の、「非日常我」たる「わたし」が「たけ」とめぐりあって感ずる至福感と、完全に通底する。

「へんに安心して、居心地がよく」という、コミュニティズムに特有の「詩的共同体」的な自己充足感こそが、コミュニティズムに対する修治の期待してやまないものであった。

しかし、コミュニティズム側は、彼の期待とは正反対のものをもって、こたえた。

プロレタリア独裁。

それには、たしかに、新しい感覚があつた。協調ではないのである。獨裁である。相手を例外なくたたきつけるのである。金持は皆わるい。貴族は皆わるい。金の無い一賤民だけが正しい。私は武装蜂起に賛成した。ギロチンの無い革命は意味が無い。

しかし、私は賤民でなかつた。ギロチンにかかる彼のはうであつた。私は十九歳の、高等學校の生徒であつた。クラスでは私ひとり、目立つて華美な服装をしてゐた。いよいよこれは死ぬより他は無いと思つた。

私はカルモチンをたくさん嚙下したが、死ななかつた。

「死ぬには、及ばない。君は、同志だ。」と或る學友は、私を「見込みのある男」としてあちこちに引っぱり廻した。私は金を出す役目になつた。東京の大學へ來てからも、私は金を出し、さうして、同志の宿や食事の世話を引き受けさせられた。

所謂「大物」と言はれてゐた人たちは、たいていまとりもな人間だつた。しかし、小物には閉口であつた。ほらばかり吹いて、さうして、やたらに人を攻撃して凄がつてゐた。

人をだまして、さうしてそれを「戦略」と稱してゐた。

プロレタリア文學といふものがあつた。私はそれを讀むと、鳥肌立つて、眼がしらが熱くなつた。無理な、ひどい文章に接すると、私はどういふわけか、鳥肌立つて、さうして眼がしらが熱くなるのである。君には文才があるやうだから、プロレタリア文學をやつて、原稿料を取り黨の資金にするやうにしてみないか、と同志に言はれて、匿名で書いてみた事もあつたが、書きながら眼がしらが熱くなつて來て、ものにならなかつた。(この頃、ジャズ文學といふのがあつて、これと對抗してゐたが、これはまた眼がしらが熱くなるどころか、チンプンカンプンであつた。可笑しくもなかつた。私はたうとう、レヴユウといふものを理解できずに終つた。モダン精神が、わからなかつたのである。

してみると、當時の日本の風潮はアメリカ風とソヴィエト風との交錯であつた。大正末期から昭和初年にかけての頃である。いまから二十年前である。ダンスホールとストライキ。煙突男などといふ派手な事件もあつた。

結局私は、生家をあざむき、つまり「戦略」を用ゐて、お金やら着物やらいろいろのものを送らせて、之を同志とわけ合ふだけの能しか無い男であつた。

これは、一九四六（昭和二一）年、「包摂我」たる太宰治が三八歳のとき発表した小説『苦悩の年鑑』中の一部だが、コミニズム側が、作中の「非日常我」たる「わたし」に強要してくる「プロレタリア独裁」「相手の抹殺」「金持否定」「貴族断罪」「武装蜂起」「ギロチン」「同志」「金品の供与」「労役奉仕」「プロレタリア文学」などの、きわめてファナティックなものへの、「日常我」たる修治の当惑や不決断な同調が、虚構表現の背後にみてとれよう。

子 まぎれもなく、修治の、マルキシズムへの接近は、母源への迷走にほかならなかつた。

原 それは、一九二八（昭和三）年一二月に、弘前高校の『校友會雑誌』一三号に発表した小説『此の夫婦』が、たしかに、本多秋五が『太宰治と共産主義』（『文芸読本 太宰治』〈河出書房新社〉）中で指摘するような、「技術的にも玄人並みの技巧を駆使した不思議な短篇『此の夫婦』を発表している。一種の左翼脱落小説であり、妻の不貞事件もある。」と指摘するような、「一種の左翼脱落小説」の傾向を色濃くにじませつつも、とどのつまりは、修治の、内部の奥ふかくから発光してくるアニメ（男の無意識中の女性的なものの人格化）・エロティシズムの、劇的な虚構化であり、ついには、アニメの極限に、たけに象徴されるポモナ母源をみてとろうとする修治の、おさえがたいコミニティズム志向によって作品化されたもの、という事実によって証明される。



自體、光一郎の所に來る手紙には陸なものがなかつた。殊にも友達からの手紙は、必ず何かの手段で彼を不快がらせた。今度なにがしの社に入りました、とか、今日これこれの雑誌に原稿を頼まれました、とか言ふて彼を羨しがせるものはまだ我慢のしやうも有るが、金を貸せの、もつと凄じく成ると、彼の生活態度を非難したりするものさへ、ちよいちよいある程だつた。たゞもう、浮世の刺戟を避け暮して居る彼にとつては、どつち道甚だ有難からぬ代物ばかりだつた。とりわけ赤城からの手紙は今が始めてだつたが、その男は世に言ふ唯物論者で、此頃實際的の運動にも參加して居るとは光一郎も薄々聞いて居た。——要するに現在の彼にとつては最も疎ましい種類の男であつた。光一郎とて大學時代は、一端の社會主義者を氣取つて、赤城なんかとも行動を共にして居たし、再三學校を追ひ出されやうとした事も有るにはあつたのだ。所が、其の頃つまらぬ事で或る中年の職工と口論をした揚句、

『てめえは、どうせプチ・ブルよ。へん、人道主義にぼさんぼさんと毛が生えた奴さ。まあ、俺達の運動の邪魔だて許りでも、しつこ無しさ』

とか、なんとか言はれて此の方、

『うーむ』

と、すつかり考へ込んだまつた。で、ふらふらして居たら、戀愛の問題が起つて、とゞ結婚しちやつた。

こんな事を言つてたのはスチブソンで、なかつたかしら。

『獨身時代には殺人罪をも敢へて辭さない見上げた男であつたが、結婚しちやつたら、一ペニイの金さへ出し吝みするやうに成つたぢやないか』

まさに其の通りであつた。女房と二人で、一千圓の金があつたら、私は又東京に行きたいわ、いや俺は貯金る、なあんて言ひ合ふやうに成れば、唯物論的辯證法もなにも、あちらからさつさとお尻をからげて退却して了つた。けつ

く幸ひと、又々さし障りの無い人道主義に逆轉し、時たま、妻の態度に不満があつたりすると、

『まあ、お前もよく自己清算をして見るんだな』

なんて言ふ事に依り辛うじて、以前執つた杵柄きねづかの片鱗を示して居た。今ぢや、生きて居るから生きて居る。これはこうゆうもの、あれはあゝゆうもの主義で、死んでもいいが、自殺の陳腐さがいやだなんぞと、それで藝術家らしい生言なまふお蔭げで、ぐづりぐづりと病死を待つて居らねばならぬ破目に在つた。お向ひの子供から毎月或る少年雑誌を借りて讀んで居たら、其の雑誌社から愛讀者に成れつていふ手紙が來た。例の「愛讀者になりそうなお友達を本社にお知らせ下されば特製畫はがき」に釣られて、其のお向ひの子供が麗々、小山光一郎と書いてやつたのだらう。これは今に至る迄、妻の笑ひ草で、とんだ恥を搔しちやつたものだ。

修  
そんな生活に赤城の手紙は、可成り迷惑なものであつたに違ひない。少からず躊躇したが、思ひ切つて讀んで見た。果して。

原  
子  
主に、——先月だか、先々月の終り頃だかに、赤城の紹介状を持つて來て、光一郎に宿を乞ふた高田とかいふ赤城の同志を、彼が膠なく追ひ拂つたことに對して、諛諛と非を鳴らして居た。だけど、あれは第一、お宿とよするにも其んな部屋が無かつたし、妻が顔色を變へて反對するし、にっちもさつちも仕様が無かつたのだ。しかじか、かやうと、よく其の高田なる尾行おしゆきつきの男に含めてやつた筈なのに、と思へばむかむか腹が立つた。

君は無意志の生活をして居る。犬はよく無意志の生活をする。とも書いてあつた。

『へへん』

彼も不貞腐つて、皆迄讀まずに引き破らうとしたが、餘りにも明らかなその種の虚勢に氣がさして、其の儘ぽんと机の方に投げやつた。……

この部分の、どこが、マルキシズム小説なのか。

すでに、マルキシスト上田重彦らとふれてマルキシズムと接触しはじめて、すぐさま、このような、「一種の左翼脱落小説」に、おのれの才筆の方向をまさぐりあてようとしていた修治にとって、いかに、マルキシズムが、彼なりに求めやまなかつたエロティックな母源への迷走にほかならなかつたのか、は、一目瞭然だ。

この事實は、同じ一九二八（昭和三）年五月一日発行の『細胞文芸』創刊号と、六月一日発行の同誌二号に発表された長篇小説『無間奈落』の場合も、かわりない。

この小説の主要部分を占めるのは、表層的には本多秋五が前掲の文でふれているように「主人公の父親である大地主と妾の関係を描いたものだが、その主従の關係の罪惡的な隈どりには、左翼意識の浸潤がみられる。」ものだが、深層的には、「その町一番の素封家である大村周太郎の四男である。」ところの乾治という「非常我」たる作中人物に虚構化された、「日常我」たる修治の、意識・無意識複合の闇からむっくりと起き上ってくる、得体のしれないセリフィズム（汎自性）の人格化であり、その運動系の先端にみえがくれする、ポモナの母源光である。

それを、「包摂我」たる辻島衆二は、むしろ、作中の父と乾治をくくる共通項としての、本源的なエロス願望によって、妖しく作品化した。

そして今や我が大村乾治はこの好色の貴夫人の老獪娼婦との素晴らしい猥談と、ねっとりした温泉場の空気と、ほてつた自分の身體からだとに依る彼の性慾の興奮を苦笑を漏しながらも次第にはつきりと意識して來た。

この、(一)の最終部の、エロスへと高揚されていくセリフィズムの猥せつな磁場の上に、「非日常我」たる乾治に仮

託された、「日常我たる修治の、父をも共犯者としたててもかなえようとした、おのれの内部のアニマへの回帰本能は、もののみごとに虚構化されたといえよう。

誰が何といはふと乾治の死んだ父と生前特殊の關係があつた事は否まれない二人の婦人の淫猥な密語ささやきは尚も乾治の耳に、ねつとりした空氣を通して滑り込んだ。

乾治はその密語ささやきに依つて父が東京に行つて神田の其旅館の地下室でどんな嘲ふべき事をしたか、それも一度や二度で無いこと、又或る時にはそこを警官に踏み込まれてどんな滑稽な姿で逃げ出したかといふこと等も、みんな聞いてとつてしまつた。

乾治は親の不義、不正を知つた子が、どんなにひどい精神的の痛手いたでを負ふものか、それ迄幾度と無く小説で讀んで知つて居た。併し乾治は今この父のみだらさを聞き知り精神的の痛手どころか、うまい舞臺装置のもとに語り出された素晴らしい猥談のやうな感じを受けたのみで、單に性慾を刺激されたに過ぎなかつた。

成る程、彼はいかにも奇怪なる存在である。大多數の人は彼のこの心理を詐りいつはであると言ふかも知れぬ。併し彼は如何に想像力の逞しい少年であるかを知り、又更に彼が如何なる環境のもとに生長して來たかを知つた者は必ず彼の此の心理の詐りでないといふことを承認するであらう。彼の想像力は凡そ何物をもその骨の髄迄しやぶらずには置かなかつた。現に彼の父の此の行動も彼の嘗つて想像したそれよりもずっとずっと平凡なもので無いとは誰が言ひ得やう。又彼の成長は其のやうな出來事を日常見て居るやうな環境のうちでなされなかつたとは誰が言ひ得やう。果して然らば乾治が如何なる子供として生れ、そしていかなる境遇に於いて育つたかは、げに興味ある事ではあるまいか。

彼は又尚もこの二婦人から母の病が父の放蕩から受けついでたものであることも聞いたが併し彼はやはり之をも平氣で聞き流すことが出来た。

そして今や我が大村乾治はこの好色の貴夫人と老獺な娼婦との素晴らしい猥談と、ねつとりした温泉場の空氣と、ほつた自分の身體からだとに依る彼の性慾の興奮を苦笑を漏しながらも次第にはつきりと意識して來た。

この部分の、どこに、コミニズム小説のコンセプトに該当する筆致があるうか。

そして、また、それにつづく、(二)の、乾治の生いたちにまつわる、性へのめざめ、女中たちや下男たちとのエロティツクな接触のいづくに、プロレタリア文学として類型化できるパターンがみいだされようか。

そして、さらに、「乾治はこの猿と暮して三十を越した女太夫に依つて生れて始めて彼の好みの女の型タイプを発見したのであつた。乾治のこの後の奇怪にも亦悲惨な生涯に於いて、彼の前に現はれて來ては彼の心を滑稽にも此の上なく感傷せんちゆう的にしてしまふ女といふ女は、皆この女太夫とどこか似て居たと言つても敢へて過言ではあるまい。所が乾治は此の曲藝團が、はつきり言へばあの女太夫が、いよいよ町を去つて行く時が來ても少しも悲哀を感じなかつた。といふのは彼は其の時既に今一人の女太夫を彼の家の中に於いて見つけて居たからである。それはつい十日程前乾治の家に奉公に上つた、両親も兄弟も無く、たつた一人の肉親である伯父の世話に今迄なつて居たおさだおさだという二十歳位はたちの女中であつた。彼女のとても賢くそなたな眼と、きりりと結んだ口と瘦せぎすな身體からだとはよくあの曲藝團の女太夫に似て居た。」と虚構化された、「非日常我」としてのおさだおさだに対する、「この慎ましき女王の最も熱心な讚美者の一人である頭の大きい男の子」と虚構化された、「非日常我」としての乾治の、小兒的な多型倒錯型のエロス表現にみちあふれた(三)のどの部分を、革命思想とよぶことができようか。

そして、父周太郎とおさだの接近をえがく(四)、おさだを周太郎が妾宅にかこつて、赤ん坊をうませたうえ、その赤ん坊を奪つて手を切り、発狂させる(五)、周太郎が死に、乾治が中学校にはいつて、かつての妾宅の前を通る(六)のどこに、マルクス・エンゲルスの思想の反映をみいだしえようか。

それに反して、小説『無間奈落』に否みがたく充溢している、トリックスターとしての「非日常我」たる登場人物の創造によつて、都市・国家・権力・財力・地位・身分などの「反母源」因子と、コミュニティ・ふるさと・相互依存・根源的な人間関係・深層自我などの「親母源」因子との境界をどろどろに溶解させようとする、「包摂我」たる作者辻島衆二の、「ホモ・デメンス」(錯乱の人)性にこそ、注目すべきであろう。

修 それは、同じ一九二八(昭和三)年七月一日発行の『細胞文芸』三号に発表された短篇小说『股をくぐる』という、韓信を題材とした、「反母源」空間としてのコスモスと、「親母源」空間としてのカオスを、「ホモ・デメンス」へと錯乱的に秩序だてていく、「反母源」「親母源」共存空間としてのノモスの、灼けつくような奔流エネルギーにみたち作品の場合も、まったく、おなじだ。

……突然、彼は更に恐ろしき激動を受けたのだ。彼はむつくり頭を擡げた。大きい彼の二つの眼玉は薄闇の中で怪しくきらきら輝いて居た。全身の血液がごうつと凄じい勢で逆流し始めた。

——なにっ！ 俺がああ婆の股をくぐらうとしたっ？……わあっ！

彼は彼のぶるぶる痙攣して居る指先で、爪も剥げよとがりがり大地を引つ掻いた。

このような、多型倒錯型のダイナミズムがはげしく泡だつ作品こそは、マルキシズムとの接近期の修治が、もつとも

深層心理的にもとめていたものであったし、それは、一九二九（昭和四）年に発表した小説『虎徹宵話』（初出）にも通底している。

なによりも先づ、鼻がずんと高うて——、きゆつと結び、端のびんと撥ねた大きな唇、一重瞼できりく／＼目尻が上つて居る……色は浅黒く、成る程濼い男前である。胸元から紺の刺縫した稽古着をちらほら見せ、色の褪めかかった鼠小倉の紋付羽織をいかつい肩にひつ掛けて、丸窓を背に懐手のまゝ……ぢいつと考へ込んで居る。

「おすましねえ」

男の客姿を長火鉢越しにうつとりと眺めながら懶げにこちらから聲をかける。……

男はやつぱり黙つて居る。女は別段其れを氣にも止めず、ふいと銅壺からお銚子を引き抜き、小さな指の腹でつるツと其のお銚子の底を撫で廻した。ぎり／＼詰めた櫛巻も季節には外れて居るが、この女の小作りな顔には結構映えて居た。地味な細格子の袷に黒縹子の帯……年よりは幾分老けて見えた。

「お爛がついたよ」

呟いて、居汚く坐つたまゝ、のんびりとお銚子を持ち直した。

「むゝ」

重く頷き、大きい手を懐から出す。大髻のほつれをぐいと搔き上げてから、長火鉢の猪口を取り上げる。

ちえつと半分呑みかけて置いて、ずつと腕をのぼし、女のぽつと開いて居る唇に猪口をひやりと押しつける。女は心得て、くだらないとゆうやうな顔をしながらも平然と、首だけ差し出してペチャペチャ猫のやうに呑みほす。それをうつそり見下ろして居て、

「雨だな」

ぽつんと言った。

テロリストと遊女風な女のかもしだす「親母源」状況は、当時、足繁くかよっていた青森の花柳界の芸妓紅子（小山おやま初代）との交情という原体験から「日常我」たる修治のとりこんだ、両性具有化傾向のまぎれもない反映であり、翌一九三〇（昭和五）年に発表された長篇小説『地主一代』と、長篇小説『學生群』の生硬さとはくらぶべくもない。

修 『どうした。はつきり言へ。はつきり』

『言ひます。争議團家族救援……』

子 『よし、判つた。それがお前の仕事か』

原 『そうです。我々目覺めたるプチ、ブルの第一の仕事です。我々には又全國的に多數の仲間があります』

『そうか、皆かゝつて俺を攻めたてやうと言ふのだな。だがいゝ。俺にも俺の仲間がある。お前、知つて居るだらうな。俺には縣下の地主からはもとより、他府縣の地主からも、毎日何通となく激勵の手紙の來て居る事を』

『今にアメリカや、イギリスの地主からもどしどし手紙が來ますぜ』

『まあ、勝手に吠えたいだけ吠えろ。今に後悔するぞ』

『後悔？ 私は悪い事をした覺えがありませんよ。後悔なんかする筈はない。後悔なんかする暇があつたら、勉強する』

なんと云ふ馬鹿な奴だらう。こいつは確かにかぶれて居る。マルクス主義とやらにかぶれて居る。馬鹿な奴だ。黙



つて居れば、百萬長者の次男坊で、一生安樂に暮せるものを。

『馬鹿もお前位になると徹底して居る』

『仕末しまつに困るでせうね』

『地主一代』の最後に近い部分の、登場人物たる「非日常我」の「私」と「弟」の会話のくだりだが、作品全体に、「日常我」たる修治の原体験からくるカオス性が稀薄で、会話にも光澤がなく、地文もかさかさに干からびて、いかにも、「包摂我」たる作者の大藤熊太の、教条的なマルキシズム文学をなぞるだけの、「反母源」的な作風に墮している。

この傾向は、『學生群』にも共通しており、母源喪失シンドロームという不治の病いに冒された「日常我」たる津島修治の実像から汲みあげたみずみずしい原液皆無の、類型的な概念文にみちている。

『僕はつくづく今迄の僕の曖昧な生活が嫌になつたのだ。へん、こんなマルキシストがあるものか。實に立派な偽善者だ。小早川、考へても見ろよ、月々、生活費の十分の一にも満たない端金を、それも上の方からの命令でいやいやながら出してよ、後はよくいつてプロパガンダ、讀書會。これ位の所が我々學生に許された最高限度の行動さ。社會主義的學生運動さ』

『うん、まあ。……。誰かのインテリゲンチヤ論の中でもそんな事言つてたな』

『カウツキーだ。君から借りたあの本の中に書いて居たんだ。實際僕もそう思ふな。だが、それだけでいい。それだけの行動でもまことに偉いものだ。現に此度のストライキでも、全くいいチャンスだ。チャンスだ。學生間へのプロパガンダには持つて來いのチャンスだ。……だが僕には其の任務さへ果せないのだ』

『それア君……』

之には理由があつた。ブルジョアの父祖を持ちながらも、悪い事は嫌だといふ人並はづれて強い潔癖を持つて居る青井だつた。彼は之のP高に入る時から、ブハーリンやスターリンの著書をトランクの底に忍ばせて居た。それから三年、彼は主としてP高の藝術運動の先鋒となつて、とにかく活躍して居た。それがつい最近に至つて其の藝術運動をあつさり放棄した。藝術運動は、階級闘争の輝ける逃避場である。藝術は、殊に文學は決して革命家を養成し得ない。浪漫的な、随つて没落の見えすいた革命家をのみ作る。共鳴者、シンパサイザー之は文學に依つても作り得る。そして此の共鳴者の獲得は仲々必要である。だが、それには、文學よりも、もつと確かで、もつと地味な、そして何よりも、もつとくく安價な方法がある。個人的な忍耐強いプロパガンダ、その他、團體、集會等に於ける適度のアヂテーション等々。世に言ふプロ文學に依つて我々インテリは少しの理論も教へられない。要は、我々の持つて居る理論に其の作品の持つてる意識感情が如何程迎合するか、である。幾百回幾千回となく試みられながら、未だ一回も成功しなかつた企圖。プロレタリアに讀ませるプロレタリア小説。こんな皮肉な事實はあるか。インテリにはインテリに讀ませるプロレタリア小説しか書けない。之は恥しながら事實だ。眞のプロレタリア小説を作りたならば、先づプロレタリアを正しく教育せよ。すべての仕事はそこから始る。尊敬すべきさる闘士が言ふ。

『今のプロ作家達は、あんなインテリ臭いプロ小説なるものを百篇書く事によつてでは無く、其の稿料を我々に寄附する事によつて階級的に存在の意義がある。文筆業は割に金になるものらしいから、筆の立つ者は——勿論プチ、ブル的に——どんな小説を書いたつて構はんから合法的な職業として、文へになるのも鳥渡よいぞ』

それからレニンの功利性一點張りの藝術論は全然正しい。だが同時に青井には到底堪えられん。

青井は、そうして藝術運動を潔く放棄した。校友會雜誌の委員も辭したし、劇研究會幹事の榮職も捨てたが、たゞ

修

原 子

小説の方だけは併し、將來の所謂合法的な職業として、金になりそうな、大衆ものの書き方等に就き、いやいやながら乗り氣のしない練習をぼそぼそ續けて居た。こんな世の變りめに於いては、金にもならない、又餘り人にも讀まれない小説や、詩は手淫に等しい。かく人だけが一番うれしい。書いて居るうちに色々の妄想が起つて、遂に何か自分は、人生に於ける最も偉大な素張らしい仕事でもなして居るやうな何とも言へぬ好い氣持がして來る。所謂文學の阿片性である。之は慢性となれば傍から他人がどんなに忠告しても駄目である。いよいよ手淫に似て居る。

もはや、一目瞭然であろう。

大都市やついには國家へとはてしなく自己を母源隔離させていくコミニズムではなく、それとは逆方向の、地母神への卑わいなあこがれを中心になりたつ母源空間へと自己をとめどなく求心化させていくコミニズムに恋慕するのほかない、母源渴仰者としての津島修治にとつて、当時のファッションとしての「プロレタリア文學」は、あまりにも、異質な、ふさわしからざる偽装であり、仮装であつた。

当然、『地主一代』に対する、淡谷悠藏の、「これをプロレタリア文學といふには相当問題がある。……(中略)……」地主一代」は序章以來、その焦点をおそらくプロレタリア文學の範疇に到底入り得ぬところに定めてゐる。「哀蚊」を取り扱ふと「農民大会」を取り扱ふとにかかはりなく、その焦点は定まつてゐる。怪奇的なエロティシズムである。」という指摘(「焦点検討」、『座標』昭和五年四月号)は、とりわけ、「怪奇的なエロティシズム」を見破つたという意味でも、きわめて鋭利だが、それに、さらに、本多秋五の、前掲の一文中のつぎの部分をかさねあわせれば、事態は明白であるう。

太宰治さえ左翼の影響をうけた一時期をもったのだと、昭和初年におけるマルクス主義流行の例証をする側に、どちらかといえばくみしたのである。共産主義を学び、それを摂取し、身につけうる人間と、太宰はどだい人種がちがつていたからである。

太宰は、共産主義を裏切り、そのことで心にいた手を受けた。それでなくとも、共産主義と同性質の一切の思想に、結局は背をむけるほかない人間であった。十年前か、十年後に、高等学校への入学をむかえる時代に彼が生れあわせていたら、あのような形で彼が共産主義にめぐり合うことはなかっただろうが、そのときにもなおかつ、彼の文学が根本的に別の性格のものになっていたとは思えない。

修  
太宰は、意志なく、計画性なく、克己心もなく、人が生きるのに必要な能力を欠き、生きるのに必要でない能力ばかりが秀いでた人間であった。共産主義は、他になにはなくとも、生きる能力だけはあり、生きたい欲望のとくに旺盛な人間の思想であった。太宰はいつも死にたい傾向の人であり、消えてなくなれたら本懐という人間であった。生きたい人間の思想は、共産主義のほかにもまだいろいろある。そうでない思想がもともと例外なのである。太宰は、生きたい人間の思想一切から、いつかは分離するほかない人間であった。

子  
ついには、母源へのはてしない迷走の一部としての、津島修治の、マルキシズム体験の章は、小説『學生群』の中絶と、一九三二（昭和七）年一二月の青森検事局への出頭をもって、表層的には、姿をけす。

しかし、「日常我」たる津島修治の深層にとりこまれた、この、母源への迷走体験は、一九三三（昭和八）年、「包摂我」たる太宰治の登場によって、さまざまな作中人物たる「非日常我」のドラマへと虚構化され、いつしか、一九四七（昭和二二）年発表の小説『斜陽』中のつぎの部分などへと、あでやかに花ひらいていったのであった。

革命は、いつたい、どこで行はれてゐるのでせう。すくなくとも、私たちの身のまはりに於いては、古い道徳はやつぱりそのまま、みぢんも變らず、私たちの行く手をさへぎつてゐます。海の表面の波は何やら騒いでゐても、その底の海水は、革命どころか、みじろぎもせず、狸寝入りで寝そべつてゐるんですもの。

けれども私は、これまでの第一回戦では、古い道徳をわづかながら押しつけ得たと思つてゐます。さうして、こんどは、生れる子と共に、第二回戦、第三回戦をたたかふつもりでゐるのです。

こひしい人の子を生み、育てる事が、私の道徳革命の完成なのでございます。

あなたが私をお忘れになつても、また、あなたが、お酒でいのちをお無くしになつても、私は私の革命の完成のため、丈夫で生きて行けさうです。

あなたの人格のくだらなさを、私はこなひだも或るひとから、さまざま承りましたが、でも、私にこんな強さを與へて下さつたのは、あなたです。私の胸に、革命の虹をかけて下さつたのはあなたです。生きる目標を與へて下さつたのは、あなたです。

私はあなたを誇りにしてゐますし、また、生れる子供にも、あなたを誇りにさせようと思つてゐます。

私生兒と、その母。

けれども私たちは、古い道徳とどこまでも争ひ、太陽のやうに生きるつもりです。

どうか、あなたも、あなたの闘ひをたたかひ續けて下さいまし。

革命は、まだ、ちつとも、何も、行はれてゐないんです。もつと、もつと、いくつもの惜しい貴い犠牲が必要のやうでございます。

いまの世の中で、一ばん美しいのは犠牲者です。

人間存在の深層が秘匿するエロティックな母源へとはてしなく自分を遡及させた、「日常我」としての津島修治が、「包摂我」としての太宰治をとうして、「非日常我」としての作中人物の和子に語らせた革命とは、やはり、男の内部にひそむ超時空的な女のイメージとしてのアニマへの帰還であり、あらたな命をうみだしつづけるポモナへの凱旋であり、すでに両性具有化ヘルマフロディテスされたおのれの根源への、極私的な回帰なのであり、それを動機づけるのに不可欠の要因こそが、若き修治の、擬似コミュニティズムとしてのコミュニティズムが逆幻想として虚空にえがいてみせた母源への、いたましい迷走であった。